

## 第8回みどりの食料システム戦略に係る意見交換会 (生産者（若手・家族経営）)

日時：令和3年2月8日（月）13:30～15:00

場所：オンライン開催

参加者：別紙参照

### 【先方コメント概要】

- 本戦略の考え方や方向性は理解。
- 地球温暖化などの大きな問題に対して、本戦略で将来に向けた方向性を示してもらえるのは、非常にありがたく、ぜひとも推進してほしい。
- リンゴ栽培では、化学肥料の使用量をゼロにすることは可能だが、欧米と同じ考え方で化学農薬を削減するのは難しい。
- 地面の下草を刈らないことで、害虫が樹木に上ってこなくなるため、被害を大きく減らすことができる。果樹栽培においても、農薬を使用しない環境を整えることも可能かもしれない。
- 化学農薬削減に関して、EUや米国といった乾燥地帯を念頭とした考えに基づく50%削減は厳しい。
- 夏場は、化学農薬・化学肥料を使用しない栽培は不可能。取り組みやすさに応じて、品目ごとに目標を検討してほしい。
- 攪乱剤やフェロモントラップのような化学農薬に代わる資材の開発や、毒性の低い農薬の開発を進めてほしい。
- 自動草刈りロボットは、家族経営だと購入が難しいため、シェアリングのような仕組みが整備されると良い。
- 害虫の駆除は人手が必要であり、高齢者にとっては厳しい作業であるため、作業の機械化が行われるとよい。
- 機械で肥料を直接土中深くに埋め込む技術により、空中に蒸散してしまう（温室効果ガスの原因となる）有効成分が利用できるようになるが、こうした機械への助成があると良い。

- どのような農薬を優先的に削減すべきか整理をしつつ、生産者への周知・教育を行ってほしい。
- 化学農薬の削減に向け、規制を設けることで、技術進化が起こり、人々の考え方も変わっていくのではないか。
- 全国で大幅に化学農薬を削減するのであれば、慣行栽培を行っている農家の意識と知識を変えなければならない。 収入保険で減農薬栽培に取り組む農家向けの仕組みを導入すれば、進むのではないか。
- 日本独自の有機栽培の基準や化学農薬に代わる資材を使った新たな制度を作ってもよいのではないか。
- 生分解性マルチのみならず、海洋プラスチック問題、緩効性肥料のコーティング剤についても本戦略に入れてほしい。
- 本戦略にアニマルウェルフェアの観点を取り入れてほしい。
- メタンガスの発生を抑制する牛の品種改良や飼料の開発など、新たな技術開発に期待。
- 今後10年に向けては穏やかな目標を立てつつ、20年、30年後に向けては、大きな目標を掲げて取り組んでいくことが大切。
- 2030年には、化学農薬10%減、化学肥料10%減、有機JAS 0.5%、2040年には、化学農薬30%減、化学肥料50%減、有機JAS 2%、そして、2050年には、化学農薬60%減、化学肥料70%減、有機JAS 10%が可能ではないか。
- 2050年には、基本、化学農薬は使用しないといった前提の下で、販売時には使用した農薬を明記することを必須とするなど、生産者の考え方を大きく変えるような目標を設定してはどうか。
- 生産者自身も積極的に情報発信を行い、かかり増しコストについて消費者の理解醸成に努力しなくてはならない。

(以上)

(別紙)

第8回みどりの食料システム戦略に係る意見交換会

(生産者(若手・家族経営))

出席者一覧

有限会社せいの農園

せいの こうじ  
清野 耕司 専務取締役

Decofarm

まつもと かおり  
松本 香

すずまさ農園

ほり みすず  
堀 美鈴

みのり農園

たかはし かな  
高橋 佳奈

眞榮城牧場

まえしろ みほこ  
眞榮城 美保子